

新年快樂！（中国語で、明けましておめでとう、です）

私は小学校1年生で不登校になりました。福岡から故郷鹿児島に転校したのですが、転校当初なじめなかったようです。国内でもこういうことが起こるわけですから、他の国での学校に通うとなるとどれだけ不安でしょう。実際、習慣の違いから学校でからかわれたり、言葉が分からないため授業についていけず、不登校になったりして、学校をやめてしまう外国籍の児童や学生も多いようです。子どもが元気に学校に通う。その姿は親にとって嬉しいことで、これは万国共通です。事実、外国籍市民が最も心配することの一つに子どもの教育があり、長期的にその地域に住むか否かを決める重要な要因ともなっています。

親は親で悩みを持ちます。日本語や日本の習慣が十分に分からず、困ることも多いからです。私には小1の娘がいますが、学校から渡される膨大な連絡プリントに驚き、読むだけでも苦労します。日本語を母語としない外国籍市民はもっと大変なことに違いありません。また、私の知り合いの台湾籍の母親は、日本式の弁当の作り方が分からず、子どもがいじめられるのではないかと心配したそうです。

さらに深刻な問題があります。外国籍の方には子どもを学校に行かせる義務がないため、日本での居住期間が短期間であることや、金銭的負担が大きいこともあって、子どもを学校に通わせないケースもあります。学校は生きていくための基本的な知識と考

えを学ぶ場所です。基本的な教育を受ける機会を与えないことは子どもの未来を奪うことでもあり、将来、犯罪に関わる可能性も高くなってしまいます。ですから、外国籍の子どもに教育を受けさせることは、子ども自身のみならず、彼らを包み込む社会の安心と安全のためとも言えます。外国籍の子どもが日本の文化になじみ、自分の文化にも誇りを持って学校で学ぶ環境を整備することが私たち大人に求められています。



文：県立広島大学 上水流久彦 助教

イラスト：県立広島大学 ロナルド・スチュワート 准教授

2012(平成24)年 広報あきたかた1月号掲載